

川で観察

Point1 川に入る

P. 22では、川を下流と中流、上流の大きく3つに分けて説明しましたが、川のように場所によって大きく異なっていて、そこにすむ生きものにも違いがみられました。川の観察のポイントも、その違いを考えながらみてみましょう。

淀川や大和川など大きな川の下流は、水量が多く、また危険も伴うこと^{ともな}から、川に入らないほうが無難^{ぶなん}です。

実際に川に入って観察できるのは、川の中流から上流です。そのあたりの川では、流れの蛇行^{だこう}や大きな石などの障害物^{しょうがいぶつ}によって、水の流れの速い場所^せ（瀬とよびます）と、水が淀む場所^{よど}（淵とよびます）^{ふち}が交互^{こうご}にあらわれています。

淵^{ふち}は水深が深く、川底には砂や小さな石が多くなります。一方、瀬は浅くて、川底には大きな石が多くなり、砂などはあまりみられなくなります。瀬で流された砂が、流れの遅い淵^{ふち}で底にたまり、このような形状になったのです。

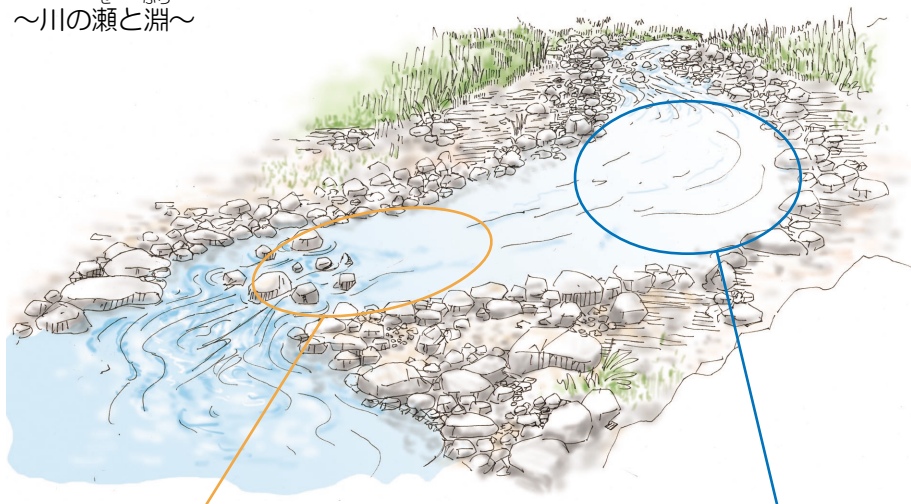


149. 川の上流

まずは、橋の上などからこのような川の様子を観察し、実際に川に入って川底の状態などを確かめてみましょう。

淵^{ふち}は急に深くなっていることがあります。十分に注意して観察しましょう。

～川の瀬と淵～

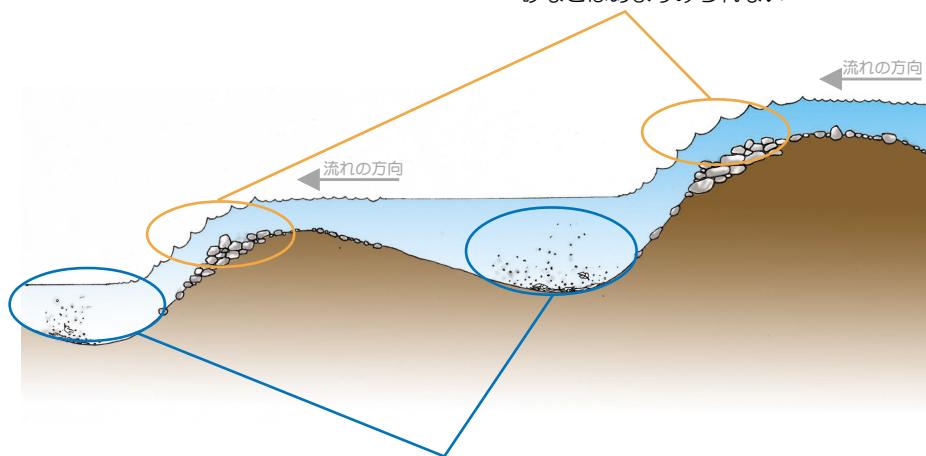


水の流れの速い場所 (瀬)

水が淀む場所 (淵)

～川の瀬と淵～
 (横からみた場合)

水の流れの速い場所 (瀬)
 →水深が浅く、川底には大きな石が多く、
 砂などはあまりみられない



水が淀む場所 (淵)

→水深が深く、川底は砂や小さな石が多い

二

Point2 水生昆虫を採^とる

水の流れの速さや川底の状態の違いによって、つまり瀬^せと淵^{ふち}では、そこにすむ水生昆虫(トンボやカゲロウなどの幼虫が多い)の種類も大きく異なっています。できるだけ細かい目のアミを使って、水生昆虫を採集し、その違いを確かめてみましょう。

瀬^せではアミを流れに垂直に立てて、上流側の石を除いたり、足でかき回したりすると、流された水生昆虫がアミに入ってきます。

淵^{ふち}ではアミをのぼして、川底の砂や落ち葉などをすくいとり

ます。
川に入る場合には危険^{とみな}を伴いますので、子供は必ず大人の人と一緒に観察して下さい。



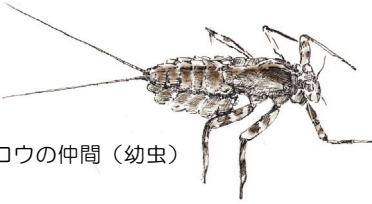
採集した水生昆虫は河原^{かわら}に上げて、大きいバットやトレイなどに入れ、石やゴミを取り除いて昆虫などをさがしてみましょう。

瀬^せではヘビトンボやナガレトビケラ、ヒラタカゲロウなどが多く、淵^{ふち}ではサナエトンボやコヤマトンボ、モンカゲロウなどが多くなります。これらは一目で違いがわかるものも多く、同じ場所でも条件が変わると、すんでいる生きものの種類が違うということが発見できるでしょう。

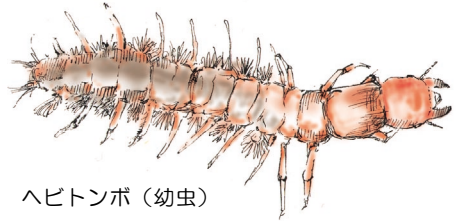
また、同じような採集をさらに上流の山地溪流^{けいりゅう}などで行い、中流で採集された水生昆虫と比較してみても、その違いを確かめることができます。山地溪流^{けいりゅう}ではカワゲラ類が多くなり、サワガニや中流とは種類の違うサナエトンボ、時にはムカシトンボなどがみつかることもあります。



サナエトンボの仲間（幼虫）



カゲロウの仲間（幼虫）



ヘビトンボ（幼虫）



150. ムカシトンボの羽化



151. サワガニ